八犬傳結局下編拙評

下

1普4
600
77

特
門 イ曽 4
號 600
巻 79

昌平坂學問所

てハいよく書風のるすとふとおもひくらの心まどひ
何ぶん解けかぬるまつき失敬をおもえで例の
長言は筆をつひやせえことゝりやとまも及ぶるど
正論のうへをみぐりはとかくやまはあらだ○大ゟ官
の奇異を犬江がいひかゝ犬探さゝ正木さゝさて犬村
が論ぞくゝところ狂又おくまゝ大が自弁のくれまき
それこれを合せあぢたひ見れバまことは深くぬ
ぬ人ゝなどおのれらがいたんハらつりてその妙論妙弁を
けがせまもなりぬべくらつハおりへどもさりとてまた
外まいふべき言葉もあらざれバ狂深くぬくたぐぐ

感服之道家の昏ひしるもあらんが其あぢはひも知らぬ
していえんハこれも又久りて失敬にあらもまゝめど
尸解蟬脱ふどいふことゞの論弁此上なるハ有そむ
ふまするといふも感心さる大妙論中にさいの一事
をいえんハこれもいかゞあれどもおのれ意のとゝろを
いふに一体和尚もをごろ尸解の呼えありとの言こ
ハ実に彼和尚にその説ありやそしやそハ知らぬ
此論中に此言あらさるゝさふさちかの百四十九回の合
釘ぬかり無しふどいえんも失れなれどぬかりそくもいつし
やりこゝましものかふ風んやう○此奇異仙家佛

徒にハいはゆる家常飯のみなれど本傳にしてハ是
までの奇異よりも又一ぐんの奇異とやいえましさる
をおの長言中にいつるめく其奇異正論にたづ
るゝ事無く正論奇異につかゆるゝ事無く彼此を合せ
てあぢはふまバたゞ此ところのこゝろぞかの仙家
佛徒の常にいふところをはきゝむるまもたまらて
いひつべしゝ私が感服せざらんや深妙とこ○犬
江がたゞに奇異をいひあらるこそおまいへるめく主外
あれゝ大活佛の孫局ハ必此傷にいてるべきな
まバそのみにおきてハ主外ふらざるとも本きの

孫局しからざらんやかくらざらんや前回麾光石宇の
喝いとゆる漸く佳境に入るの筆かゝらしめ風ひし
○義實老侯の卒看官も又歎きらべくもあらぬ
こゝちせ志れどもたゞめあるものをとりあらざる事
そし全傳を孫ばるに此卒を昏もさでだめ
氏元貞行等も又同じ君臣同年のをとりいと
ゆる三世の孫深しといふべし岡巻茂端安房にいくらし
よりこゝに四十七年一方に覇として鳳子龍孫賢臣良
佐十世の功業を基して天に皈しる其又本傳の
もつとも圓目大眾系の一つなりけり此卒に筆をお

ほくせられなれど病床よりたゞしていまえの際のさる
さる或ハ送命哀悼しまして又ゝ佛事法令も事
あまたなるんを皆たぶられて只一夜句にして事を
とめられる源語の雲隱の巻の名ありて詞の
無きに同じくくりて深きところかゝらしとい
ひてハ事にふさはぬいひやうなれどいふも面白
あぐるひ一日深妙人○こゝにいたりのいふべきなり
孝嗣の編歴夏とありその夜ふるべきのつぐふの
事ハ既に前にいへり孝嗣編歴をとへて稲村にま
ゐりて諸談話いとゆたゆたりて居住にくへまり

孝嗣の編歴ハ老侯の卒ハあのかりかりあらはし旦老侯ハ隠君ニ孝嗣ハ當君義成ハ住る者ニ志からハ彼も一時ハ生も亦一時ハさるを[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]の鑿説なるべし

さてその四月十六日に老侯卒まてハ時候合ざるやうに仕し此ハ文のもやうにて事を[illegible]はせられしにて老侯の卒ハ[illegible]孝嗣の編歴ハ後にて六月のころのことなれば何の子ぬハこそし氏元等の死も必孝嗣編歴の後として昏見しやうにもあらざるべきにてこれハ[illegible]かりにて文のもやうによりての昏き所とアるべきなるべしかたあれど此ところうちアるまえ何とかまぎらはしくかハ氏元等のことなかくも老侯のハ[illegible]昏まぎれき歟のやうにも[illegible]なるハ老侯の卒においてハいづれにてもまぎるゝよしあらざれど孝嗣の編歴稲村の談席に時日まぎれてハいかゞあるんとおもはるゝあれバこそかり○近国他郷の大小名仁義に感じ英武に憚り好みを殺だまくさてこゝぞかゝるべしかゝるべしこれ義成のこゝろにて八犬士をも昏るゝあるもちろんこゝぞかゝるべしく武田澤尾北畠結城等をもさべてこれにて結び甘利荒元錦織桜馬細曳平大夫小山朝重景西までの熟名をもせらさびひさぞれしう答礼の使者も又それくなるべく結城への三人ハ百二十九回の前を合されるる

いつもおぼつ精之細之○犬村化石の論づいて蟬脱の
論義成の言の如く是までハ言葉をてくあるにてに
いたりて此二論引づきて志りも大論明矣あるハ此
玉の礼讓のこゝろハその学力まことなるにあらふ大学なり
ところ此人ぶまハかしくさびしきやうなりしが近
ぬ文武づいていと花ありこれ筆線造化には
るなれどその造化の主人公の自然配剖もみある
べきこ此明矣の役づけハかつとも本さのるとらふ
べし此條ぶまに昏べきを筆のまぎれにもしらう
いえでも志るきてなれバもらさバもしてもあるべき

あの十三年忌ハ前の結成の約束ある故に前に大志に当ら結成へ答礼の使せしハ十年の後とあるハ此回

なれどさしもぶこの評にとやかくといひくらし此
人のるなる我もしおらんも何とやらんあらきに似
しれバそこに昏おしておくまでこ○大浩佛ハ御
者といふべくあらぬもちろんなれどもしかづそこのこと
言葉にてその腰をおしこそにてこそ十三年の
久しきをたさみて志らしてぬこおもろくかぶぶの
よきこ言のついでともて聞にせられくる二天にぬこぶ
もしろきつぶおもぶきいとく深しぬ此十三年に
のこにハかしく久しきにるして三年忌七年忌にて
も有ぬべく又かの四天玉五十佛菩薩浩佛のぬ作

をとく思ひきらさらし一丈の実なり実なる年に宜しけるとしさでハ年紀合ゆをいひハ其義成の年義一通の年も是に同じ是ヲ作者と苦思とも有官是て知らるのこと是等の矢尚ヨウなるべし

此の段ハ此の詳の如し大士贈姻孤能外天社

まして八ちと年数長きやうなれどことに此久しき年数あらざしてハ後の年紀につぐあしくさしあらるてハ此回末に大岩室に隠して次回のたびめに犬士退隠をおりふに犬士等の仕ふる年月みじかきにつぐふるしそも退隠をおりさといへども俄ふるまをあらざ狂かしとまて出生の男女まて自此年数月ゆかなれと次回ハ其標目も云こまて勝回下編大團圓とするされてさべて結びのさぢなれバ八犬傳のるのこんハ此回まで有べきハ八犬士八州を妻とし里見の干城として房総の治畔をゆづり價を二つにせば

丹亭の段まで此の段ハ書ふりそを十世の後までも書連祝しハ且ハ夜元の後且ハ有官不遠憾なり若も此の大義にて作者の得意あらせり

是皆屋より出て実にかなり実用をかり是て屋形合のあらん事のことなくてハ屋をもて実に成し假をもて真に成せし作者の罪いかし深るへし歳墨といへども誣さらせ事とも作者憎悔の事と見るべし

おちくるをひろはせで夜ハ夜をさしこそ犬士の犬士たる能を成しをへて十三年まで痣子消え靈王の字も消えて百の小珠ともにかのぬこの元にくり犬江が神祭さんに消くるこれ如まいへる本傳事の始ありて終のところなりぞや八犬智勇八百八十回まで にみせつくされたり治に又能臣なるところハ此十三年にこめられたりとやうんべきかをバ十三年にはハ狂あらざさんおりつりかたりて後住念成ゆ年とのためまも又つぐふよしとつふべし十三年いかにも深ぬあらうに ○此今ト寺の牡丹和白咲みちしる何

輯やらんの附言中に犬士の牡丹花形の痣子のる
後に解まる和ありといひあるしがさてこそふとよ
づぞ眼をぬぐはるるや○念成が後伝しらべきるを
おまはやくそのもしハ昏きて有るながいへしと
そのまもあるにハ壮年とあるが小年数をおはそ
におしてれば三十ばかりも有べきかなるべき此僧にかの
指月院にさかしげなる小僧のそのうみ念成の名ハ
よしありげなれどおまかのもしを昏きしところの
拙評にもいへりしかし此福田に実のるべき苗ふるん
とハいかでか知らまん念成さてふたち念玉之かも

バそやく二世の傳燈を分身させおかれしるまてなり
なるえ仮にといへども住職をまじきこ大をかの院に
志ばらくあらされしハかのくぐらに用ありてのゆゑ
なりとど今ましてハ此僧の因縁もありけるまや
とさへぞおもえるく傳中に大につぐの僧ハ影西も
さるをこそとしてこれ外なるかの分身の小僧をばやく
新和のおよりまるうおまおもひもよらざるをさら
にさだめおかれてしかし里人の姉と犬士のたあ点
そづ功徳ある二夫に深く微妙に早き人ハ年に花
あらぬ僧法師のこ人にハあれど深妙におきてそ

誰かこれをハめでなりたゞらべき感じなりたゞらべき
○義成がかの問をこ大おどろく色をしてさえ
云ていふともあらんど此おどろく色をきが明弁
さるところにくひ合ひてあぢたひたゞぬくさて
その明弁ハ既に家に引上げて合せいへるがぬくさ
べてたゞく感服をいふの外なべきやしそし然
さふなれ義成の言のめく此直詭なんごろまでいよ
いよ明弁いたりいたり○白浪ようちよせたる
沈水木にて四天王五十古佛を外しらべきもちろんな
まどさりとハ奇しぬこれを八霊玉のをさまり

とハこゝにても狂へるかハ知らんなきくきしぬなり
ゞふ五十四村でハ[illegible]五村としてはまりの一村
にての數珠これも又ぬこんさてその數珠にてこゝ
にはぐ〻義成ちしめ諸犬もろ人その奇異を風嘆
さるの道具ぬこ水晶の霊物かの霊用に成るを
なればかなりに此奇作の沈木數珠チヤンどかまて
あり狂これを延命ちの什宝として今成にやこへ
しる佛家にてハこれらの物を何とかいふるを知れたり
是これど名目をこれらり其名目の物としてさふハち
又是當寺の玉璽といひつべし例ふがら一物いくぬ

鋸山の五百佛ハ建立近世のものなるを[illegible]に載て誤ふ[illegible]後圖ハ[illegible]食所[illegible]

[illegible]

用ましてまゐる[illegible]自ゆゑ[illegible]ざや四天王の至妙
あらびに五十佛の妙ハ[illegible]ふとそし一杖をあまし
ての数珠ハいえゆるよけいの志ごとゐるにを妙
まゐくかくのめし風ひせざんや感服せざんや
○鋸山の五百の石佛のるまおのれハ[illegible]ゐるどさだ
めて今ありて皆人の[illegible]ところ[illegible]そを[illegible]
会して五十の種佛をしづむるとハ今にはじめるど
さりとハ妙奇案五十佛の玉眼百顆のぞ玉まづ
き外まして狂木[illegible]の八王のをさまりしるまこと
に奇々妙々案右にいへる今現なるべき五百石佛

并評他者の肺肝を見るの如しちり[illegible]

に合せていえゆる演義虚実の間の妙大筆なも
しろしといえんもなかれ奇妙ここ○凡[illegible]
うりしるべきぬハ今さき云あらしくいふとあら
旅どハ霊玉のをさまりを四天王の玉眼とハ奇
妙とも奇絶といふべきやしもそき至妙ゐるなぶ
八つのあを四つのあまして殆びをさあらるゐるゆゑ
てもましてまいくいひしりしれども二十八年ゆ
りさぐる[illegible]ん天機玄妙とやいえん鬼
神ふ測とやいえんさるとも敬服感服どころ
まてハ[illegible]腹稿之ゆりし大がるまあ

アし百顆ハ五十佛菩薩となり犬士護身の八
玉ハ四天神将となる房総にてこそまゐりてかの神丹
あらざるなり八士の護身も今ハ用なれバ文字
消え身をさらせられて四天の神眼となりて房総の
将軍塚として十世を鎮護して犬士後に仙とは
ゆきて世外に遊ばるにあそべど降魔の武徳ハ国家に
のこせり歓喜を伏姫と拝するなれバ四天王又おの
づから八犬士をあがめて国のまづめとするなれとも
べしもちろん八犬士をまゐらせ里人のしあるハ化現の
四天神将といふべきに狂化現のこなるで本文にあ

るところの古来よりの勇名の家この四天王の名目
まも又会ひ拡筆まゐらせくいふまでにて八犬に
して四天に四天にして八犬にの明兵本文二行にし
て萬をつくしてはりまことに深くぬこに深ぬ
あるもことにうらふ本傳のあるじしる八犬士の本尊
なる八行八霊玉大象ふのをさゐりに深く頭ぬこ
案鬼神不測ふくざんや天機玄妙ふくざんや
まぐいひたるゝ○ハ千こ奇美ぬ狩輯のみかその玉
のぬ用もことにおいて又一段感服まさゐり○玉に
文字はりてハ玉眼にふつがふしてこそちやしど文字消え

この精神ぬてハ玉の光りを増しかゝるハ神ハ明日一顆の辭玉とやいふまし

文字消ゆれば痣子も消うせるの奇こぬこその
因と果との隠微深ぬハさふたちこそ犬士等まこ
きはくさしめられしより又くりくりしく同じるのこゝ
やうなれども二十八年ほどより此文字此痣子をこそ
いくらて消さるゝつもりの腹稿定めて有りと云さる
まても感服心服なり玉ハ有まいへる如く文字有
りてハ玉眼のをさゝりにふつぐふん消ざんが有べからず
痣子ハ終身ありとても子細ハあらじ於いてハ此痣子
犬士こゝるのさるしあれバ本傳の上にてハ痣子あるを
かへりてをさんあるやうにおもはれて犬飼が面上に

あるをさへ何ともおもはざるやうにあらまくりて有
つるうちに消うせてよりあるへバ犬士等がはきう
めいへる言の如くハ行の文字といへども文字はりてハ
白玉ならざましてや人の身に痣子ありてハ疵こそ
しとハいへべからず消して無垢清白とせられるさう
とてハ精細深ぬあるうふその痣子の消ゝる次に
牡丹花微ぬの細弁ハいふまでこそくさしあるう
玉の文字きゆきバ身の痣子も消ゝるとだらう
まても奇ぬ〳〵おもしろし○義成が八房の犬の
雑毛と犬士の痣子の牡丹花に似ゝるのよしの問を

おこせとしてしろづ房總を弁じ牡丹の傳来をふ
明弁しるハせちろんまてこゝに是をあきらめられ
るハあまきなかしらに房総をいふ人ふどのあるから
あるべしふろみ字ハせつとも甘心例の一識を増ほ
しるいとよつこゝぞし○こ大一ゝんハ犬坂が言をそ
いひられど義成のことにぶふ是ハ臣僧が解べきな
なりとて解せるまことに此解ハ犬士みづからいふべき
あらぞこ大の解しるべきところせちろんこ猶この大が
解せるところハこゝにあらぬ伏姫の教によるなれバ
せふまち神解に同じ此條のことにぶ次この條も

しらるべきこゝにかせしろいかふにいかふおまもいへる
めく今一回大要分論あるなれどしろづ此回がそも
そもよりの隠微深妙を解きあきらめて事の結び
のところに此隠微ハ犬士等の智識といべとも解くべき
あらせ又解せべきのせぢまもあらぞぶふこ大あらで
ハ解くべきこゝろかりそのこゝろかりも今ぞよいこ
ゝてこそ知りはられかるてかりひしるハ結局にえ
伏姫神霊せしくハ神変菩薩再現して何れのる
を解あきらえて結ぶまてもあらんかとかりひしこ
いと浅かりき浅かりき再現を昏まぜこ大をして解

しめられしるところ再現ようハあぢはひ深きぬ事ま
ことに感服せり於感服のみもあれどそハ又おくまて
いふべしさて大ハ元より道徳の志じるし道徳の僧の
いまゆる三世を志めし或ハ天機をさとれなど演義
小説其餘とてもいつもあるなれバ蟬脱自在をゐざと
ても其神靈代りの解き役しさいこそうべきにおまもい
へるめく其法師道行熟して自然に亀先喝字の奇
異もあらハれ来たり十三年お既に凡胎を脱して出没
自在の通をゐてありいまゝ寺職をゆるされ○バ延
命寺に住持してあれども其実ハもはや塵世の僧

ならざされバたゞに道徳の高僧ならざ伏姫敵音に
奉仕の神僧之志りしおるまてこゝに神靈にかゝりて
天機隠微の發明役漸あり精え深いりふぬこえ
○牡丹のてゝ陰陽のことにしたゞの細密弁さべて感服
をいふの外又何をかいふべきおまもいへる痣子の牡丹
花に似たるのよしハ後に解べしとあらかじめいひおかれ
しがこゝにいたりて其精弁まことに深しとも深くかり
かのあらかじめのをりしそうにおもひなしく犬士等が
痣子ハ八房の犬の雑毛にあやかりしるえ八房の雑毛の
牡丹花の形なるハ青海波の馬のたぐひとつんてもなり

ゐの段をしも世の
看官のよく思
ひさるもあるへけ
れと浮雲の如く
漏をとなくかく
まで辨しつくされ
しは実に発信
の一大忠臣なる
る愉快々々

あんたどそれまでもよろぐ爸ゐ狩いかなるよしあるやらん
犬は牡丹ハとりあハぶろ女のあるをといともくいぶかしくりし
が此陰陽の妙理にありけりさてもくてもさても深
くりけり深くりけり今此明弁の感心ようたじめ此理
の隠微をもて牡丹花形の雛毛同じく痕子とやらん
しるその深妙狩いくしほの感心ん○神薬うせて
其香ものこゝぬさてふてちゝ大がくそしき解あり
さらに蛇足をそふべきならるど事あらはしハ神薬をそ
バあらざ犬士護身の霊玉に同じ今房総長く童夫
の所いたり本傳大團圓の結局となりたれバ玉も薬も

ふ用にふくらうところで此ごとく玉ハ身をさなれ
薬ハ消らせたりまことにぬゝ深しとも深くらざや
霊玉の結びの絶妙感服ハ萬々既に前にいつりこの
神薬の結びかく消て香も弱ぬにやらんとは是又こそ
外絶妙感服千々ん神薬なれバ奇しらべきハ元なりなれ
どこそ射にその号を自由にして志ぞく用にせら
まてたり里見仁義神助の家なりともかゝる神薬
いつとしてふべきも何らぞ又奇て自由を昏上に弱し
おくべきもあらざれバ云々妬外とりうへしなまひし
あらんと消らせしめ狩蒲原の上云々をも弁じ

おかれたる例の著翁の筆なりところ深くまして
感心之○種を植るハ若き者をよろしとしたがふ草木
などもさるゆゑあるよしなれバ是も又さもあるべきなり
但し此ことハ多くの夫役を出さべきかにてこゝへていふ
それにハ及ばぬで念ぬと夫役十四五人にて手ぬた迄
こゝなれバ壮年の念ぬがつゞかよしといへる之夫役の十四五人も
もちろん少壮をえらぶべきハごとさしにいたでもおの
づからに其ことハ知れてあり四天の方と大先生大士
総轄よりつゞきにて種佛ハ政木江田に下知して多く
夫役をとあるゆゑにふとつゝてハ種佛の方政木江

是ハ鑿鋭ニ
ハ不過ち夫
社なるゝ評義の
舊癖なるべし

田がかりのやうにもゆゑして二人が年齢のうへにまぎら
はしけれど二人を種佛を植る役にとよハあらざ二人ハ
其方角を領し又部屋なれバ人夫の事を二人
に下知しておさせんとの事之おぎれざるやうによく
見るべきこと評ともあらで例の筆つひやしの
事なれど少しくまぎるゝところも何事ハこゝろとも
めてつゝかりとの一人がたんのしるしと之○四天塚木
配当ハいふとそく五月雨のころなれバ枯るものなるゆ
ハりとハさうとハ猪筆つくさんあるゝふ事ハさしても
ゆきてすなれど毫末のうゝぎとぞけ感心之

敬服之○富山嶽室の悲倉ハ伏姫神霊の本宅ニ
あらざ伏姫ハ富山の観音の化身なれバ其ふもと峯
の観音を伏姫と拜むべく勅額ハ峯の背なる手掛
の石室にをさめしれバ奥の院として拜まるべく臣僧ハ
かの嵓崖に定に入まくしてとの大が言ども又義成が
勅額を神能として禿倉を置きたりしを悔い神ハ云
佛ハ云々と弁じて三輪をたゞしにいひて大が言のめく
奥の院を伏姫神霊安居の地として祭るにふせる
るおのれにハ眉のむそのらるしてまきにハあらずどそハ
評中にいふべきるかんされバそを思うおいて見れば

せるども例のぬこも結ばれしるゝ富山姫神社の
神号勅賜宸筆勅額ハおまもいへる如く伏姫の極栄
此極栄なるべきにハ有べらざ此極栄をたゞめよう
奥の院に埋めんでしまふてハそえも云く又いともかし
こき勅賜の詮にそし一しん嵓崖に社と置きかの
遷座の時の次にしきよりこゝに十六七年を秋の
祭もおでそうに有ゆるふべきれバそれにてるをたれうと
いふべしさて空中楼閣ハえより演義小説のつまなれ
どれこゝにいふて空中の嵓崖禿金をバ實地の
観音堂に舘して張びしまえれくる例の実事

深妙之又〻大が入定も勅額ありてハありがたし然ため
なるの作畧の妙〻ハいふとも云しまいくいふるす
ながら自他自在にして上ハも実現うごきこそき感服
之鑿説をいはで〻大伏姫神霊の意を知るとも
主君の祭られしる勅筆の神號を申さるゝも云し
てこそくーはるつゝの石室へうつしをさめしるも
そこぶらいがよかるとど然不然座ていとゐをこひ
て忽然として走ていくうそのまゝ入定せるが大繰
の真面目かんがんの妙不なるよこそ云こゆして神
號をうつしかし志らして入定とぬるゝ孫ぞく

蠟を嚙がめきるすを唇まんや順をおふも時なるは
よるべきるゝ志かれ又例のうごらぬ筆ハ義成さふた
ちゝ大が成ーいへるこころに感快して云て悔いいへるの
理説ありて士民まもふれ志めさしむる申さ申さぬ
などのるハえよりいふべくもあらぬのつぶハあるさの
ほりおまいへるめく大國系にハ今一度伏姫をおさ
るゝまでもあるんかとおもれしにおさるぞして奇ハ出べて
〻大まで むをぞれ伏姫ハたゞ画面にかゝぶきをうへ色
られしるまでまて富山姫の神社奥の院にうつしをさめ
観音の化現となりまして むをぞ志まれしる

深しぬし感ん此其鼠を腹を裂てハ大士をおし
よりはじめて一部にこれらての種々奇異靈驗今
全成してもはやすゝ靈異も及ばざるゆゑ
歓喜の本殿に皈りて奥の院に寂然たり神女
香しのうらだうせ大士護身の玉身をはなれ狐いぞ
痣子のきえしるまでしてべて皆同一理深いふさて
ゆかりはるら姉峯の観音ハ伏姉の一周忌に建立
まてそこにてハ云こまでなれど今をもつて見れバさふ
はもはやくいはゆる本地堂にてありけるぞやさりと
てハ深遠奇妙感服こゝ姉の徳義ハ彦の奇す

功成り名遂テ身
退クハ謙ノ道也
夫の九言ハ
盡す評論の
多辯ハ理和の
為かいふなり

を記し姉の遺書とも一厨子の中にをさめしうと
かしこにしてもつともさるべくして今のために又いよく
妙なりおもいへる評外の眉の皺ハさしおきて本傳筆上
にてハ伏姉を観音にたゝみてみて奥の院とむさび
をきあらはるゝうちぐもおもしろく感ん〇大が
別もこのぞこて大士等に退分隠逸をさしむる言
あるそも又論ぜバ論ぜべきてもあるなど大
士のをもうを仙にせらるゝが本傳の主意にして水
滸のをもうとハ趣のことゝふるところ未なりし唐山の
演義小説にも忠勇の義士一時功を成し或ハ一方に覇

を成さるゝどがをまう仙をなりて世外の壽域に遊ぶ
にふしらるかれこれありこれは大きなかるべきおもぶきもなる事
とおぼしきまゝまゝて既に弓此月の為朝にしたりや
られてあり迦嶋記侠客傳も結局にいたりてバおそ
らく同じからべきかされバ八犬士を仙とせらるゝにいたりて
大が別れしのぞみてもいさゝふひの言をあらさ
まして先づそのもしをおこさるゝなりとも深きところ
といはんか本傳有名宗傳の八犬士を新に傳せらる
として先づ大てふ一大奇僧をあらされて犬士の總
括とせられ富山をもしくより今功成り名遂ぐるとも

すべて此奇僧がえらるゝ前因には父ともいふべく現
在には師といふべきそれ今さらに云ふあらうしくいふまで
もなしされバいざふひて里見に皈せしめ功名成り
しめて又いざふひて世外に皈せしむるの深ゝぬと
感心感服ゝその感を狂もつくしていはるほどれ
ども保のまたりをとき筆にはつくしぐくしひて眉き
ふぜ中にはこれらぬるまやあらんと唯かぞうりと
さるまでも深くぬと感心ゝ感服ゝ如智勇干
城の八英士に退身をしてもなほ薬籠の神丹
うせしに同じく今は虜縁事にてありて智勇用

あらぎにまうしいとゝあるをもてゝ結局の大図者但し
神葉ハ香どこも有らぎこれハ二代の火火士狩英名ハ
つゝへて有せり此同じくらぎるハ又もちろん之○ゝ大が
いとゝ母をこひて忽然とあらぎにあらるかくこそ〳〵
いともくおりろし狩この忽然まひらあらぎ十三年
おより出没自在なり其論そこにつくしてあり奇
異にして奇異ならぎ奇異ならぎして奇異之
深しふかし○念成富山にいるゝにもやく嵩崖
ハ大盤石にてふさぎてあるぬこ犬江途に念成に
逢ひてそのおもぶきをゆゑきさてハゆくともかひふしと

詳細の心もていぬ假てもて真ぶかなきに庶し兼須此者何ハらさる所なりと思へり詳細の意のことゝ太江ハ念成の言を疑て又行て見て形を繼て後ふ

もろともに稲村に陣して事云ことときこえ上るを
きこしくおろそらなるやうもあれどその念をいる
に昏まんる元より何のしさいも有べきならぬをそれ
に昏まぎしてこれに昏ましハ例の詳者あるの示
あらべくらつ此ところハ此方が文段のいきほひも
工合よきうとおぼしきところもあればならべく狩
又いろうて田斐云きをゆゑ早きところの犬江
を昏ましにてもあるべしとまれかくまれ狩是を
かにかくいひおもちぐそふたりんなもとむるの禁
をこそうしにあらもやせん○こゝに又の奇おにうる

此ら八所にあらはさそいわれも夫
まるるひ為證
知らせ僻言
あらんかも

るすハ昏もぞりてこゝまでハらちもあらぬ例の好筆
感心ニ又或ハ含蔵にいそうめて解は教を添よせそし
ゑらみてみるえようかくあるべきをふかうらみ狂おすぶきおわ
志ろし新詠自在をさハやかなる時とりておもふき
よき古をといひ庭房卿を思ひよせてみくるほどえひ
やしほに深くおもはるく記を添が廣博にも又つがふ
よし義成が向ひハつまのるすなれバ判古をたるざ
ろいさうもさなるげなし○なき勅額ハ手製の
石室にてあらりとあるなき石室ハ大がまつらる
りふとなく字にせきまつとさうちてある石室大き

是又假をもて
真となせる理
譯を麁し冨
山雅の神號と
勅額のうちを
いともかしこげも
と師よりの疵
汝ちにさるを後
世なる彼岳に
あらせて諸人に
狗也見る旅
者の却なる
あらはる素祭
語もなく高も
なく事をけし
て仕官しなり
且大に神僧
なりし化りし
とも身の陰の
石室を磨き

ありふれあるハもちろんなれども大一人がなつくりなとば
さほど大きくもなべうつざさてハ勅額のさうつしなき
めしまてかの石なて造つる秀含ぐるあよハなべうる
にかあもとくさらの字を用ひて大きくもあつさる
やしまハあれども庭の隅ぬるごあのあそひよある穢所
の秀含の如きこともあれどもさあれバそのあをおそこびまき
そあをさむほどの石室と大一人がこざきハいへ
と大にてに蟬脱して出没自在凡僧ならざるハいそ
ちろんなれどいまださほどの法力神通あるげも
はしめてらん作しつふところハなつくるなれど姓名の

作るこれ自由なる人にしたるも是皆のことを云ふと論せらるゝ評論の舊癖を憚りなくて大人氣なしといひ敬佛姫、大人ハ未生の人ハ富山に起りて富山に盡ハ太士も亦かくの如し故に復て作者の所とも是に実録異なる以下作者の用心なるにあり是も賤

さてはいてふさてこゝろなれば神霊のあひたまけし
かいづれよのつゐをもていふべきなりとし兎念
品山屋に移らば入定まもなしとなるべけれ
あらんかなどし旧癖の理屈穿鑿をそうにおも
えれしが再思してつゐれば我ながら例の之例の之なり
おゝ感心をいへるがめく神号勅額ハ伏姫神霊の
極栄其社かぶらぎ富山に祭ぎハ有べからぎかの空
中楼閣にハ有なれど後世頽廃して今ハあらぎ
ぶまりまでも本行のさしあらうまてハ何とかやふさ
ちしからぎところで云ゝ峯の観音に合つして伏

悔の事となるべし後の自解評の是を足なりとて評論の如き猶の四書の故に前後の思念を並べられるハ頗作者の如き志を遺せり故にいハさるなり前評の如き説ハ譬ハ人の非ならぬを非として其人に服をさせて後に是をなさむるハ如し評論前評の非理なるを知らハいひてもあるべきに是をしもいひるかなりとて

姫をもとめられしかのこゝろぎ大火定必用の品
山屋をあけてあらさぬ其奇しぬゝ石室をもつ
くりして勅額ハそれへをさむるとまでにてつぶハもち
ろん十分きつしりある大奇執大妙執さるを石室
の大小兎念ハいかにおど瑣こしるつとくつせんさくを
あさべきなりけん討さらおまもいへるぬゝ神異奇
妙を眉るしところなれぞよのつゐあるハえより
にてその奇異のさるところをくれしく眉るとぎ
ところがさふたちて奇異を眉るしところなり
是等のるハ是ぞ高論にてんはそうふがら

鼠者罷の指揮
不似ちゝ是詳細
のお様にて一僻と
や云へらん矣敬
々々ヨク罪々々

狂くりそめまも理屈せんさくをおりへるハ志れ心まも
有るよと又むそうに獨慚愧してありけるに大
盤石にて嵒巖をふさぐりとあるをみるにいろうて
いよく慚愧して おくく此盤石を建けて口をふ
さぎしるもつともかゝるべきことをもぬを感ぎるこのみ
ましていさうも理屈せんさくをおりふのきあるをこそし
人もうなしぞ同じくるべしそハ今いとゐをこひもをいら
ぞ忽然と見たぞなりしるまて既に神僧をもて見
まばなりけり神僧そにおもじめてなるんや十三年ま
もやく出没自在に蟬脱してありいまぞ時いたるさ

ゆゑ延命寺に住持して人間にまじりあれどもその
実ハ法力自在の神僧にれば一喝しても石室をうが
ち成さべく隻手にても石の梵倉をうつさぬし
ましてや伏兆神霊の意をはてふせるをもてを
おもはぞしてかしこに理屈をおもひしハ久さくを
愚癡心慚愧にしえぬるまて有りけり此一條例の無
用の筆ついやしなれど慚愧ハさふたち其ぬを感
さるによりてなれば其感の深き程どをいたるほし
くてかくくこぐしき長言に及べるしりくどくも
神号勅額のをそなり嵒巖又定必用ハ奇ぬよ

奇妙感ひ感服せり○大嵒巖入定奇妙と
いたんもえあらしげなんどまことにもつて奇妙也
大の發り高僧宿徳のおきだまりの如く佛身を現
じて延命寺に遷化かの寺の開山堂にてもしさいハ
そうるべけれどそれにてハ只道徳のうへのことにして一個の
をさゐりこゝ神僧となりて富山紆境に入りハ大仙
とこもふ永く伏妙神靈に陪遊さるにせられたる
本傳因奇の團圓しるところいかにも深く妙とも
伏妙神靈狂妙神にてハ何ともしん前因にいさとる
獵疑のところもあれどそれ觀音の化現として既に

本に合して玉面公主各通大士たりこれらもまた
自然に妙なるぞやさるばさてたゞに神僧とふりて
紆境に入るにても僧家にたゝんがうさせられバ入定して
の戸解とせられたるいよく妙と自在しかに議論の
大が戸解蛻脱ことにふくてびさだかんかんとも
とハ異なれど遠く肩都道人が火定さんおりひおり
られてるのうへのことにハ對さてもいひつべしあ戸解ハ
戸解のもせよ大ことに入定して終をとまり
二輯大輔のそのかみことに死さべきいんえんを結
局のことにむさぶれしとも深く妙とも妙いふべき

詞にあらぬはぬなるふそのことに殺をとるも此畠嵓
に入定とハいふにも奇妙まいどいふるにハ有なれど
たゞうの話びハかくと二輯のたゞあらう肢行ハ定の
て有るあどもさしあらう伏姫神居の仙洞ゝるハ
もちろんにて勅号神社をまつまゐる靈嵓入定
の用にふらんとハなひもよくまぢるなるを前にも
いへるめくぬづぶにあけて其用として結ぶれらる
などに奇妙なる良なともまことに感服あまりなり
本輯もろくの事を赤むさびいづれとしてぬふら
ざるこそきハえよういふともあらぬるなる中にも此

精評見所
こゝろと名除
よりて知るに
知るの眼目あ
り目心感悦
奇々妙々

むさび又八玉を四天のむさびなど奇妙のまゝ
奇妙奇てぬこなるなり○畠嵓にてなりく
讀經の声又樵夫にしたるもの云ゝ後話成仙をつゞせ
られたる丁字むさびこゝろともかく有べし内乱をいふ
云ゝハおくにハ犬仙が其子にいふところと照應にて
かしこにくれしなれバこゝにハ畧せらるもちろんかしこハ
くれしかるべくこゝハ畧ふるべくいふともあらるゝど一僧八士
成仙同じきもやしあぢさひいとなもしろし主なる八犬
士の成仙むさびハ狂次回へまたしてあれども八玉をさ
まり痴子きえて十三年国家の干城として治を

成し功名まつらく既におのく児孫もはりて大が
退隠をいざふひおくとは及べりさあばおまもいへる
如く事のこゝにおきてハ此回にてるをもとめりとも
いふべきうちひて水滸をひきつけいふにハあらざれ
どもハ大士のる冨山嵒に伏姫八房にもあふ
にもじまり今ゝ大嵒に入定にをもまるやう
なりかの石礑と伯仲をべくいふも深こゝ好こゝ
なり○志うるを張びてこゝに那古と大田木との鯛
の一閑事を昏れ鰐吾の欲などさへあるこゝにして
之外の一閑訴さうとてハ奇こゝ好筆なるかふこれ

なんとおほのかなちのひ諸の機ふつらぬハ句論ふさまとも近来ハ大の例なれ不おらさこ心ほ相道なまいなるへし烏丸光廣卿曰秀句ハ假名ちかひも用捨せしし実な達者の書なるか

にて此回末のゆるみ次回へのうつり感ひいたんもうつり
てふあげにをこにやふんなれどいふにもく感ひ
うへまぐ奇好しなりしし此両所の鯛ハ味よく
して鮭にもそたやさるふどもなるやあるんそハと
まれかくまれ此ゆるうふる一事にて十三年中の治
さんおもちなくおもぶきにもつんなぞつんつべきやうし
鰐吾のおもしろきもいふとこそしおぷとおぷのてす
などハいとでも有ふんさてとぢめに四十八城を昏う
きてる剰筆中にある今時人のいふところにして
に大全が巡歴に用ありし一閑目くもしいふ大全が

居城まゐるところハ上総なれバ鯛のるまゐりのつゞきに
云ことゝ上総の繁昌をも昏うれしるところをまゐ
いよく精華ことゝなりぬれバ此鯛の一閑話ハ上総繁
昌の治をも昏きて結ぶるものなめまでも有ふらんか
いづれもぬ〳〵

百八十勝回下

犬士等〻大が言により退隠をなりひて云〻房総
を美まて云〻いふともあらるゝど犬士退隠のことはりとて
国事をかろそうにせんやこそ異なりゆゑをりく御仕
さらのことまて其位四家老の上にあれども其いきほひ

をてらたぞ居城に安逸をなのしこゝある既に隠居
せるまも同じ女ちろんこゝに昏るところ只こゝを
のこ昏るこゝふらじおくなる實老の世に退身する
とへうけて昏るこゝふべし犬士〻大が言に退隠のこと
ありといへどもさてふたちに退べきにあらぬ義成にて
仕へぞバ有べからぬ義通を輔依せぞハ有べからぬさ
きバとてその二十五六年あまりをそのまゝふらん
にハ〻大が言のなりぶきこそしこゝに此云〻にて仕へ居
てしかも隠るこのなりぶきいとくあぢえいあるゝ事
○四家老を結び杉倉木曽のよしをもしるして

実孫ニ証せられたる東印東もせらきみぞいづれを
例の精華ニもちろん四家老も立者株結びそくてん
有べからずこゝにそのむさびまことにぬむさびどころ
ぬ筆ハさて感ひ直え子そくして季元を嗣と
してのこゝなどちよとしてるのやうなれどもかの
実孫ニ合さるゝの妙作畧ぬに季元をかさるゝ時
もやく此意もて木曽を称しおうせられたるゝ四家
老立者株ニハ有なれど狂ゝあるのゝことも外深
きをもちひられて有なるゝさりとて大感
服なり○ハ犬士おのく児子ありてそれく二世の

犬士としてゝ又おのく必ず立つへき本姓をもとそ孫へ
き家をもつぎ女子ハたがひに配偶或ハ因あるに嫁
しふどかくあるべきハもちろんのゝるゝがゝ狂その間配
の勲きをくゝありぶきあるくさしいろふ犬山が二男落
鮎が婿となり二女子ハ十條二人の妻となりしるゝがふかゝ
るべくかゝるべし三男ハ出家をぬこ念仏の弟子とふり
て延命寺の三世となりて寄ぬこゝおもふしおりへバ
いかにも大の法脈ハ犬氏中よりも嗣べきこゝ犬氏中い
づれにてものやうなれど是又おりへバいかにも道ニアの子
が孫くべからぬこゝろといふべし道ニアが守性のきさく

なるのこゝろぞ一時の謀計にハ有なれど寂莫道人
と称して有髪の沙門しうし因をも自我に殺ざれ
しうるやあらんなりしく於此道者の子の出家ハ
道者へかけて今一段深趣もあるうとさへおもふる
るもあるやうなきどそこまでハ足るぎこれ
るこゝ及ぶりてせんさく理論ぶりもやせんようて
そハ筆をつぴやさぐ犬川が一女子を蜜崎が孫嫁ぐ
に蜜崎ハ犬士に因深し此一緒にて其因も殺ぐ
つきしうともいひつべしおそれハそれにて犬氏たがひ
の配偶に犬山犬阪とハ其るまし女子たらざるにハ

あらぎ犬江大八大塚番匠那古小七郎と二重にあ
まりてありさうせられしハいかゞんぬき意もありや
さらるどもさぐおのれう浅くうたるところにてハあまりに
ことぐしく抱へつくされてハ事をそふへ忍るになりて
かゝりてなりぶきあらぬゆゑ如しく有餘ふ足をとぐ
つけおもしとこうあぢたひふぶくおりへり其あぢ
たひハいかふもあれどさしもそれく取らりやつてう上部
会ある中に山阪二氏のこ嬢のこきハ何とやらん迷
惑のやうに政木蜜崎その外にても似合しきが
あらまほしとおもふるにこも無きにハあらぬえ於

[illegible]

[illegible]

者を漏しゝるハ是も粗糙の筆とみるべし

そふいろんをもとむるあるんか嫗ゑきのこふらだ犬氏
中へ嫗にやるしぞく二氏を別にせられしハ狂きありて
まやと眼にとめらるもどさうるもみなべくあらだ二世に敬
やりゑきハ自然の欠にて三世にて其おぎふひハ又
自然にあるべし○しづを妹早逝ハ親を病が
いふところにてつくされあれバ又何をかいふべき盈虚を
昏もしらあぢさひの深きハかちろんなれバ是又さう
に何をかいふべき親を病としづを妹との配偶ハ前に
意外なるのこふらだ今妹の短命親を病がつよく鰓と
ふれる又さ外に何ともせよ実影ハ十歳の童子にて

樂しこ極りて哀こ来る自然の理なり是より下ハ八大外傳と見るべし

の婚なるゆゑかにかくと飯犬にことゝふるあぢハひを
昏もてる精妙に三十にして又後妻をほりせざる
もとろんかくあるべきたぞにハあれど狂親を病ふるゝふ
○神童の論遊魂の弁確論明弁ハ元よりにて前の
尸解蟬脱の論弁と対しるところのぬさへ感ぬ敬服
○吾嬬の事世を去り義成も遊去本傳の年数元
よりかゝるべきあれど人世のうつりゆく紙上といへども
さぞろに感あり青はなさへ老死せりとや義通世
をまくし鈎鐔たいとけふく實荒うしろ見せるまゝ
世のうつろひにてさしもの里見の家に内乱房総事

あらんとてかの靈芝に前兆あるところとこそ又盤盧
の天理を歎ずべし○八犬士こゝにいたりて退隱せる
齡までに六十にあまりしもあり二十餘年來の素志
のところ義成に仕へおほせて義道さへとくなしぬれバふ
いたゞ骸骨を乞ふべき時なりハ二十年後のおくはそ
子にあそせところの乱邪に八房とあざの揆をまたく又
るのさとへもおなじかるべし かくいふもこゝに退隱
ぬところといふべきなり但し弁するに八一論にきこゆるも
あらざれどそれ編外の論編中においてハ右にいふ如く
うごかぬところにて退くせらるゝといふとも及ぶべ

二世の八犬士内乱の
おこそあらハ必戦
殺まへしさぞかし
浴せて内乱ハ
実するも他有の
自由にならばさい
の故に実玉族
お遊るへからざる
二世の八犬士ニ及
暇せとらせ二世の
八犬士も退くへから
さる父母の國に善
より是則乱世を
乱世をもて治世と
後をへからとを辞
ハ自ら知と知ら
ハ二世の退隠
退隠と不幸と
して剛に思ふす
なからへし

狂盛んにて寶玉をふりまき職をあらへ又後に二世の
八犬がいよるもさふにまなもしこふをさいはひとして
犄隅の義豊の轄をのぞくのこともあるらんぞかしと
にまろぞてろおのづから實玉の人とふみとなるをたすか
あぢはひあり○富山に孫子と女人の禁をそこその事
はりくろかあらざるか今ならとハおぼえるどいづれもぶ
こゝに七姫をそむふべきるにハあかしで児子にさとし
おくの言とその確守するハふまでなし 職祿をも
さそて退くべき時を知るべくさるせるハひさるハ白じから
孫どゝ犬が別をいてこゝろとえてふし○二十餘年

をへて火食せずで采治衣裳もうけざりて峯谷上
下分輕く老健さでよ成仙のてゐを先づアセられたり
七姫さでいに身まくらしらおのく古稀をるてるべく
たゞ共に仙ことごとを遂憾とするのこ○一日云ことて
二世の八犬士つれどもて黄を見ふ八仙これを知るめくつど
ひ居りて對面し云ことさとして忽焉とあらざるなりて
室中に異香のこなる児子に永訣して世を仙境に
ぐそへくらゝ大が尸解蝉脱とは異なれど其世縁を
ことに脱せるは同じゝ大がとぞらの絶ハ入定の品岸なり
八犬士がをそらは此日を忌日として此金寺に墓表ろ

八犬士冨山に起りて冨山に盡より伏姫に大も是に同じ彼朝日の東に出て西に沒ると同じ如らせ日は沒りて又出の遊く者は還らせ只姫ありて終りあるのこ悲しい哉

かいて義堯がまつるところの木主もあり深くおもし
ろきところのあぢはひなりぶべし感さべしさしも勇武
花こしき八犬士を寂然くる仙として殺ざれくる意外にて
有るからふ妙味にても有るからふ狂なりしにその寂然さ
外の妙味も妙なれども若しいへるめく忠義の俊傑
をそう仙とふるはそのいはれあるすら演義して殺くる
をつぐの忠不平をこころよくさるの義も其人のを
もう実記に合ざるの榮も成ぐくより不なきの
結もつけぐくしよりて神仙として世外に遊ばし
むる一つは其事業有志のあひぐのあぢはひ一つは

八大士各其子なくハ周の鳳史始く夫婦とも不仙不かんしハ大士ハ各子男あり且其母仙雖先とあて

其人ニ壽をあたふるのところもあらんか壽ハ福祿にふらびて皆人のほうまうところ狂其矣ハ福祿よりもつとも上ふりかの忠義の人と塵を浮雲の福祿ふらでせく天地とともふる壽域にあそびておのづらの福祿をもはるハ忠義にあらふるとてさふるとも勸善のところといえんか実記の八大士功名ハ里見十世のかぎりなり本傳の八大士ハ千歳富山の地仙有年のあれぞふる幻境もあひかるて深くぬこふるだや夫妻あひたづさふるの仙もあまたあなれば八所もともに仙さらしめん昏きくもみ自在なるべかれどそこにハ昏かれざ

浮りを富山に取なり今又何をこそ妻を伴ひ況志ずを雖早逝して八女の内一女既に闕たり必伴ふべからさとも亦自然の理にして他者の自他と志なる紀而ならしや粉千慮あらまほしくあるを

るが著翁の筆なるところなるべし○實堂義豊を論じて云ふ山を下りて諫まくなりへども云ふ八仙志のうちきにあらざ諫めてきかるべからざ内乱にいたるべきの時運を知りてあれば大老仙ハ樵夫に告げて實堂をさとさんとさらの言あれどそれとこれとハおのづらみことふるところのいまほひありやれば みづから山を下らざるのこふらざ児子等に托していさむべきをいふの言もそく黨やぞしてさみやうに去べきのるものをいへり犯してみをかなさハ益ふしをみづらのうへまていへどおのく既に仙たり犯しうとてそれに

死なんやこそあのづら兒子等まもかけて身を殺し
ての諫し益々きをいふところとみて一ほあぢまひ深
らんゝ扨ゝ大別語は其の素志をとぐるところとハいへ
ども二十年おもてやく乱撥をみて分たりぞき今まゝ
いよゝ主家の内乱おろんとするのぞみて兒子等
をも退き去らしむるこも殊外ハ論あらんなれども
そも殊中にハいふべきあらざ危邦にハ入らざ乱邦にも
居らざ聖賢のさだむるところもうごくべからざれバみづからも
他山にうつるべきてゝしおもふに乱をいとひ
て一ゝんハうつるといへども義堯にいたりて房総ふたゝび

祥和得りて志入り
るて假をもて真に
なるに似たり八犬士
既に永訣して世に
出まなりてハ彼ゆ才
者既に死したるに
同し事ありと云
ともはの益なれ
是有漏より出て
無漏に入る一大関目
といふもし而已何
そ又冨山にかへりて
ありなりを同人や影
を追風を捕る後
を極めまゝなり
まゝハ他者の中
立意にあらまかし
実説の八犬士ハ義
弘の時の勇士にあら
ねハ二世にその八犬
士ハ未生の人にて

をとゝなり三世の犬士ふたゝび仕へ木主廳月陵に配祀
せらるゝにいたり又久しく其て冨山に在るあるべし○三
世の八犬士ハ義堯ハ義弘につゞへて武勇智計父祖に
おとらざ名を阪東にあげりとおのれ里見の実記を
みざれバ八犬ハかの家いつの時代の勇士なりやをしらべ
序文まゝ附言にいたれるをみる時ハ八犬士勇名ハつ
ゝたれどその履歴ハつまびらかならざるなりぶきこ今それ
を傳せらるとしてハ開國創業の英臣とせられるハ元
よりて三世にこゝろて勇名を阪東につゝふるにせれしハ
かの政木の姓名を副つゝへる実記のむるをとゝもてる

三世の父生の二者生の人なりしとも古人の事に載る所詳なら祇ハ子孫ありやなしや作者も知らず思らく知る者ならるへし

まやあるんかもしばそこと八昏れてあるぞれど四世五世狩
勇名を副ぎおそひて里見の八犬士しるまでも有べき
こ二世ハ兵ぶるの時まして末に實堯義豊の内乱あれど
それをそこそこ退きさるのところなとバ智勇の己有べき
をりそし三世とを昏るへきハもちろんなれど狩三世軍
陣ぶ志ぶくなる時代とに及ぼしてつゝへて勇名を
あぐるにせられしろうべなるか那てまて八犬士の傳まつた
く局を結ひ英名此一大奇編ともに千歳不朽めで
たしめでくし○次に政木を結ばれくに本傳においてハ
亞犬士ことにハ二実記につゝしきあるの名家そのむさび

政木大全孝嗣の女児實堯の側室にかなりしと云ハ則作者の深意ハ古のまゝ文に明々地に説出さ祇とも義堯の母ハ孝嗣の女児なるへしこの故に政木氏の実堯の室にて義堯の外戚にさるもなり三世に至るまで大田木の城地を前らるにてこそ子孫に至るに及ひて里見氏の庶子をもく彼家を嗣せるに至る実録に合したり而云作者の深意ハ此にて使ひ先生と異なる所以法中の濁ともいふへし

くそしくせられぞてハ有べくぞ亞犬士ハ、れども真の犬
士にもあらざれバ其男女乱邦に居て榮をふし其末
実記にあるところの如きももちろんさるなげそし女子實
堯の側室とふれるハ二実記にあるを昏るにしらまゝハ
實堯やぶさうの世にも狩栄あるのところを昏もし
ら或ハ又義堯ハ其側室の生むところとして遠く後
に箭九郎が政木を副ぐに一線の血傳ある伏線を
おさましらいづれも一女子實堯の側室にせられしハ一時偶
然の筆にもあらじか○大全九輯七の巻の口画出像に
成嗣とありそそうみてひそうにおりつりしハ孝嗣の孝

字ハもそろん女よど八王中義字ハともかく孝字ハ何と
やん信乃ささーあこや女ん孝誠ハ孝ハ里こん飯ま
りて義成の一字をあこ成誠とあるやふでおもひて
所くろしこつひこそるあくるこかとばうのハ筆
工のあやまり校合のこおとこ
まてでとて所おぼめくこの為こぞこと
くるそもおくし○十條蜜崎其餘とひそび五
十三太等ふこともに筆とたぼさんくる例の猪名ふる
うふこの金碗ハ神餘のかなきろあくべし○二色の
犬士初の八老仙永訣の日を忌ひとて遠て
義之根元を義成の伝説堂こつくる生て其こ
つて是をまるおもいつくハ便を外仙遊の毒
城ハ毒城さーあくる現ものあくるあぐそひはきことろふくざや義之義成と
して嫌疑を訪ての自立ハあめぐ義豊ハ父仙之訪さ
ぜハ有べくぐで父仙を復て家統を嗣ぎ内乱をたい
らげ房総をこづめくる一時中興ふいふぐーはハ我ものこと
常陸もそうぐべきふくぐでこと宮をまえ豊ハまた
ある賢主仙業の八犬をまろ二名の犬士をまねき
三色をおのくもちいて羽翼ハとふをろめくそその

らを田て又思へらく
孝ハ孝誠のこと
らを第一輯小金城
ひを第二輯こ本ひ
工夫こ高吉小作り
しもあること故小説
字なるこの生ホーも
及なるうもの孝名
時孝孝誠こ年信
の三孝ともいふし
故本の改名の一ヶ
とも知信の孫ひな
る事もあらまと思
ひ捨てあけるに首
より和漢著作ふ文人ふーさろこ
ろ如此著ホーて
高文人ふーふの花ふ改
ホ婦知小字を課
てふひ書の名を始
ふひ改へり此の改定
あれこと沢ぐ看
官ハふ苦界を思ハ
ど高首服り昔の
若湯と同日小見

事業(じぎょう)あるをあくまで堅忍(けんにん)不抜(ふばつ)なられば枚挙(まいきょ)に遑(いとま)あらず
でとその枚挙(まいきょ)にいとまあらざるごとく
○回来(くるきたる)の義實(ぎじつ)忠義(ちゅうぎ)貞烈(ていれつ)その成敗(せいはい)実(じつ)の大(おお)なるを
あげらるるて里見十世の大(おお)なることをあらはす義
豊(とよ)を世代(よよ)かぞへかぞへ忠(ちゅう)を論(ろん)ずるに里見軍記(さとみぐんき)普通(ふつう)の
詩明(しめい)ならんにもとろんに里見軍記(さとみぐんき)普通(ふつう)の
軍記(ぐんき)ふどう世説(せせつ)のるに同(おなじ)
あるとて筆(ふで)ついでうて弁(べん)せんるに及(およ)ぶまでもおきてそう
う要(よう)ある精神(せいしん)筆(ふで)のつづくごとくやんへ文上(ぶんじょう)のあやなる句
徹(とお)る○結回(けっかい)の一(いち)うう數語(すうご)本傳(ほんでん)又一(またいち)きうの結局(けっきょく)要語(ようご)

いふべき語(ご)で感心(かんしん)の妙語(みょうご)あるをおまふうと拙筆(せっぴつ)をかぎくあげ
おどせどうて妙語(みょうご)をけづてよふんん文(ぶん)を語(かた)
語(かた)いふも本傳(ほんでん)結局(けっきょく)の要語(ようご)うう底服(ていふく)あまうはう
詩(し)の全篇(ぜんぺん)うべき歌(うた)の達意(たっい)まて
えくおうろき詩(し)を自解(じかい)あるめ〳〵精編(せいへん)珠玉(しゅぎょく)を集(あつ)め
て流行(りゅうこう)を獨傑(どっけつ)うう流(りゅう)の今時(いまどき)のこふんやゆく
さきもとせの仮(かり)うう雄(ゆう)をあ〳〵ふの書(しょ)ある
べくもあ〳〵八重(やえ)ぶん風(ふう)ふうのう詞(ことば)のう
なみぬぶ病眼(びょうがん)代(だい)写(うつし)編述(へんじゅつ)の苦(くる)しのほどさそ
とえうるまで如何(いか)あ〳〵バ千載(せんざい)の遺憾(いかん)あ

べきにまくてまろうに成をへらハ敬を眷官のさい
をひよろこぶべし 教ぶべし ○他家諸将師の成敗
得失を実孫によりて其崖略をしるされたる此時代の
東国の諸家興廃を知るにしうて是又もつとも要
ある餘譚といふべし ○此諸将の実孫又此事特に
里見四世以後の実をしるされたる前條にても今こゝ
にてもいつぐ如く実を知るゝにもつとも実用の要譚
これバかの空中楼閣おひくたみよせむさびとめられて
のこゝにいたりてハ著翁の正大の実筆としてかふらば
此実譚あるべきなりたゞせるゝふと其実筆精筆を

里見氏四世より後
并小諸将成敗の
記ハ此大外傳と見
るへ紀に見ゆ等字
くてものなるなれとも
始おりて紀なくハ始
初ハ御らん者官飽
き思ふもあるへし
あらをもて実ふとて
居を結ぶ者ハ即
他者の真面目に
古の実ハ当又下ふ
いふべし

感服のうへに又あやしくいさゝかひそうにかもしるゝなり
里見三世にして徳おとろへ編中幼年智勇父祖におと
らで未だのもしき義通早くせを去り次麿ぞんじの
外のようぬ人物義通の子又よりぞ叔姪従兄弟お殺
さにいてる犬士をやく挑をうて退き隠れ狂その子
二世の犬士をも国を去らしむる本傳さしも義實義成
の仁徳まさハ行具足の犬士霊玉四天の眼目として国を
鎮護に合せてハさてぶる慨嘆せらるゝなれども
犬士成仙二世三世英名を副まで結ばるゝにハ年
数あり里見四五世までも昏ましぞてハふらぞ昏るゝ

としてハ結局のことにてこう今さてハ此内乱をとやかく猛色
をまじへて昏るべきまもあるぞ今此内乱の二実をしてふまも
かの八犬退隠の様今二世犬士乱邦ハ居ぞの賢三
世犬士又榮をはして勇名を陸東につゝふるの孫びのつぐふ
まも司ひられるところになきり里見ハ四世五世とかつる
へど犬士ハ乱にあづかるまゝ安暇の八玉つゝぬきて
かぞふきバ三世合せハ狂一世のめしがふも八犬士傳ふ
るかふあぞまい深し里見内乱の一こんハ暇嘆せ
らるれど義堯におよび又国をなり兵隆くつぶして義
弘一方に覇として武名をふるへり義通こそふ幸ふれ

義堯實堯の子にて義成の孫にてハ義實に義成の
徳つゝえて十世におよびしるよくありへば二実孫本傳合
せまてもふそくハあらざるへ狂回来にいそれあるごとく
その連綿北條にまされるところ二実に其徳によれる
あるべしかもバ實を知るべきの要をこぐ實によりて
十世をしるし二実をもつて里見をむさびかの霊芝の
兆をもてるにおいて解せしめられるにさべてもちろんさるを
ありけり他家諸侯の成敗実をしるの益あるに既に
おにいつり狂ひそれくの成敗ハ本編のうへにてもいふ也
これらの成敗にあるべくありしなる人になれバ本編実記

巨田氏のる詩句の意見ハ桃者の深意を知らざる故ニ此ハ分説を巨田実ハ太田なるを以て新六郎助友も実ハ新六郎資朝是ニ志るハ此の家今の大名衆ハあらざの故ハ其名高家の文字をとらせしハ禁忌を避ん為ニ志るハ第九輯の四五六編近鑑りもて四く花ハ太田資始君図老ハなりかひて作稿を新六郎廢と

合しつゝそもさいふく婦幼といへどもなりひまどふのるをそく狩ゆくるいとさへなりふもあるなりしるは只一人巨田新六郎助友ハ本孫の助友といへてたがへり本孫の助友とも忠まして罷ぬき父を暗殺されたるんにハいかぞかうらみ怒らざるん呉子晋がなりひもあるへきことなりなれど此実を記されあるなりゆきまてハさる志操あるてみるもあらぞもちろん此時代戦ものの士のふしひなれば此人のみをいふべきなるゝどさしも本孫まてハ一個の立役むふづるにとりて大士の剣敵忠勇花ある大株にせられてあるにその実結にいたりてハまことに龍頭蛇尾埃つひに

まらしめしかふ事りて幸いとく憚り思へとも今ならせんかたなけれハ加伝の助友ハ宿案の如く雖り果したるに此の故ハ諸孫成敗の段ハ至りてハ実録を上目として勝も作り設さるをなしかれハ加伝の巨田新六郎助友ハ吉宮領里見氏と和睦の後ハ其ニ其ある盡くなりしとも後の助友ハ次朝の実君信ハて此の野史架空の浮言を補ふまの戦慄を以て罪を附せる色をもせり浮ひ此の若

里ひへのおちこみハ婦幼ハよろこぶまてもなりらめと本孫の助友にしてハいかにもふさはしからざれにいる本孫さしを一花あるの立役実結をうんてハ色も香もあらぞなりぬこれがためのことにハ二実結のあらぞもうふとさへぞなるなるに狩ならふに此父子ハ有名の人にハあんど臣孫にして将家なるゝバ定正の滅亡道潅を失ふによるよしを大きに昏るまでにて此父子のむさびくさしくあらぞもてなりなんかとハなりへぞに道潅ハ此時代東国にて出羣の一人もへとも人の知るところらつかの辞世の歌をあやまりつゝふるもあるなれば

異でも知らぬと云く
と評せられしハ
実ニ有官ニ学
こゝ鳴呼誰何を
容易ならん三息
なれ。とそらみる
れ

そもと弁じ給ふ事あるまでの寛闊華麗らぐ道節を
つくされたるにて八貴べからざる事なれバ助友ハおよぶべくて
あるまじく評ニ道節ハ綜中名ハあれども出てハあらじバ
助友ハ八犬士の外難譲いづれもまたニ結ばれたるにてハある
まじきことにて有りけるがまいて如くかのれいまだ出
あるの軍記を見ざれバさしあたりてもあらぬちかき何がし
殿をそろいで其世系を見るに新六郎の名ハあれど資友
というハ見えず例の用心新を斬ニ啓て有るほどなれバ
助友ハことさらニ加へられたる歟又ハ世系の外なるか
北條ニより後里見ニて志ぞし勇名あるの実録を

道漢ハ名のミ
而で本編中ニ
出ありしハ是
亦彼ニ於て不憚
りし但実録を
写して出来て
からぬからさるを
而ハ怪べからぬ

つぶさにせられあれバ其人あるハいふもさらなり道節の子
なれバふさはしからぬハ見ようなれども本編のごとく
其智も父と同じからしる実録のみゆきをみる時ハ
そハいかがあらん但し本編の助友ハ道節の代役にて
道節にてハ志ぞる用にあたるところ犬士と対敵ニ年齢
もふさはしからねバその子として花をもたせ道節ハ文の
上のみにてそのことき八始終助友にまかせられたるめざましき勝負
のさまをおもしろき事にせんとてかく其智も父と同
じきうなどハ其人の子といふようにて仮ニおかしからふ
ところハそのこころをえてぞあるべきなれバこころえ

演義の作り物語と正史実録との合ざるをせんさく
ごとてハをことともとこゝろ知れこざこしそを知りつゝもとこ
言ハ里見の実結ハ上にいへるめくにてさゐらげあらざれ
ど助友の実結ハ右もいへるさしにぬにおもしろく呑
されくる編中一個の立役が就頭蛇尾たえ立てあり
さてるがいかゝにもしくおもしれてこそその慨嘆の
こまでもこえあらまぬゆゑこゝろいでゝ此もしき筆
つひやしの志ぬこざこに及べるこゝろかくいふものあれ
ましてもこれがたゞ二実録の筆を曲べきやまして
著翁の正大筆においてをやかにかくに此二実結

ありてぬあらぬなりゆきに及べるハ編中の助友が不
幸といふべし ○こゝにいたりて又こそそうにふとおりへ
らく正木大全ハ里見有名の勇士それもと扇谷の臣
河鯉佐太郎が皈して姓名をかへらるにせられしるその
もとこゝかくみ如く妙肺色しるハもちろんなれど扇谷
を去りて里見に皈しくるところハかの二実録の助友を
如しくふまへとせられしにあらざるゝふとるの似より
をおぼゆるまゝ一時附會をいひつゝるも又一笑なるんか
似ようといへバ細川政元が死と道滝が死と同じく浴室
にてふりたるをあげられくる二実結中にあらびてはり

これあのづくのあらびまして其似ようのあるを一奇と
いふべし○実結の事狂外も論ずる人あるまじき
まもあらざるめれどかゝる稀世の大長編出名の人其
数いくそだくともたゞまぬは一時の用のこゝろまぢ
ハ格別おしまでもあるまじ結びなくして
立消せるハ一人もあるなし是又稀世の大妙筆
しろところなくぞや右にいへるめく何ぞうあらぬをさへ
結ばれざるなあらざるに此様立てるもあらぬを結ばれ
しておかもんや結ぶとしてハ此團圓回演義のおぐろ
ろに終りてハ犬士既に成仙せりさるを狂新筆を

下の石笑士なるハ
実深小苗字
のこゝにて俗名迷
ことにハ假に此の
名を負せしなるを
思一義列も是に
同——

まじへて餘譚を長くせらもんやいふにかくの如く
にて結ばるべきことに又実深によりて結ばれたる
にハ狂深さありてのるともおぼしきもとや様立てる
殊びの中北畠武田隣尾の通好籠大刀自稲戸津
詹まこ結城の使などハもちろん両管領はじめこれ
らの會盟にそむらぬふどハ作おぐらの中のるゝども
なればはやく前回にして結びてありその積ふる程ど
おりふべし実深にあげられたる政元の條中徳用ハ
いふまでなく再六鴉四郎忠義列等の名ハ筆の
いきほひのためまでに一時仮りに其善悪を目せられし

もあらん意をとどめつゝんバ実にまぎるのさゝめらげ
あるてまゝ渡て伯部戸金ハ実姓しうへきもちち
ろんなるんかおのれ室町治乱のあらましハ知らざるも
あらざれど其くさしきハ元よりおほえざ今そら
まてハ行さらん雪吹姫の名と此弱のうへのことなどこ
そ仮なれ其姫ハ実に有まてあらべし今これをいえれ
あるまて此姫のむさびもつきしうね政元ハかく結びれ
あるに政長の結びあらざるハ政長の名ハ一様なれども
此人ハかの八犬士、大法師上洛の時政元やめられあらて
執達のつぶよきに一時用あるのこ別にあづかれるところ

三浦暴二郎の名乗ハ藤倉官領九代記に送せり
一言に義理とおもしとも正しからしと義武ハ胡意作り設立
其の政に実録に因る陣殘の設ハ胡意名乗を送せり

もあらざ政元ハ親三浦につきて稙こてまあらおのづら
孫中里兄のおもいまゐるむらふづらの一人なり復元も
又しぜんに同じ賢良なるの政元弑逆の復六そのを
ちう共にかくの如きなる二実結を出されくる懲悪の
筆もこもれるなるべし道治のをそうをつぶらし
てかるなのうをも弁ぜられし下宰のるハ既に前にいへ
り三浦父子の結果を眷るに暴二郎ハ名のうを
眷もぞるさを用ひられてあるうとおぼし○里
兄ならびに諸将の成敗を実録によりて結ばれるハ
深きあるうとおぼしとなのにいひくるそのおもへるやうを

いひこゝろみてん本陽実の人を昏るゝには実孫のおも
ぶきをもとりまじへられてハ有なれど大きことをしてべて
架空の筆なんづくハ犬士の基本として雲異
陽中にあまねき伏姫ハ筆上にあらはる奇女こゝ大
法師同じく未生の人こゝその姫ハ峯の観音の化現に
て奥の院に安居しゝ大まゝ嵒巖に入定尸解し
てともに有名の間に寂然たり名のこつゝにりて履
歴をきの履歴を傳して昏きと昏きつくされたる
ハ犬士成仙して又有名の幻境にあそび名ハ主也に
つゝへて世にとゝふるところの里見有名の八士こゝ本源

まいひこゝろしらとおぼゆるゝにおいて本伝のるまゝ
にくをたまうとゝふべしさて里見たゞめ諸ねをも
結ばれだてハ有べからるゝバ餘談としてこれを結ばる
にこれまでハ空中樓閣これハ実地の人といへどもそれ
に上下それハおのづから空中にあらでハあられど今架
空ハさでにをたりしるに実地の人ハ空中に有べく
もあらざ元より二十八年の空中樓閣ハ犬士の為にこそ何れ
おぬしこそのためにハあらざそも剰筆中まゝ前の
附説ともいそれあらずありて其人によりていはゆる
心誅の筆をまじへられたるもあれどそれ空中上下の

ついでにまうさんとてその心詠のためにかまへられたる
接図あらざ演義ねぐらに古人を虚実するハ
漢も和も老のるまして古人を弄し今人を蔑まる
あらざるるハいふことそれど里人ハもちろん其餘の
諸将善不善ハともあれ此時代さしも東国の名大
家たれバ架空の譚をたりてのこゝにいふ其結び
くゝじに餘譚実探によると筆せられてそれく
のをそうをつぶさにし百五巻の架空長話を
実結して婦幼まも其実を知らしめらるゝところ
正大の実筆といふべきも猶又架空虚実の筆

此等ハ的中頗
悔評ともいはま

まも善悪を顛倒して昏るとするあらざれバ諸将の
をそうの実結これまでのねぐらりのうへの結びと
してもおほくなぐるそく驕まるも貪ぼまるも奸
なるも愚なるもみなほろびしり里人の家といへども
吝嗇と不孝順とハ親族相殺その内乱ありこれら
の実法もつとも勧懲にあづるところの深切筆と
いふべきなりおのれそじめに一こうり人とりしはなりへ
るハ両管領其餘諸将のるハ前回なるかの学盟
約にそむかざ或ハそれく好きを通ぜるにてるの
むそびハ滅しう里人のるも又義通より後の

説八犬士の我が国に生を享(う)けて
詣(まい)りて其縁の半(なかば)を結(むす)ぶに職(つとめ)を二(ふた)つ犬士にゆづりて
退隠(たいいん)成仙(せいせん)するまでよろづ〳〵里見十七代を志るし
諸(もろ〳〵)のところ〴〵にて二(ふた)つ結せるハ三つ結せるハ五つ七つ結せるハ九つ
まるぞ〳〵八おぞろの
しをきまハあ〳〵ぬるとおもひしが再(ふたゝび)三(みたび)読(よみ)つゞけ
志(こゝろざし)ありしハおもひのたゞ〳〵ざりしうて二(ふた)つ結(むすび)の有(ある)べき
ことゝうもあぞろひ前段(まへのだん)かのごとく長言(ながごと)いつ
らめし〳〵十(とを)巻二十(はたち)巻だろうみあふ〳〵ばこそあれかゝる稀
なの長(なが)ものぞろ百巻餘(よ)の大部(たいぶ)の結(むすび)いふもさ
実結あ〳〵でハふさろ〳〵じきろ二(ふた)つ結して綴(つゞ)り終(おは)又
〳〵そもぞろ本伝の八犬士をいひ功名富貴(こうみやうふうき)もさもあれバ
夢(ゆめ)のごとくにて外(よそ)あそびーふ〳〵ぞやさればその
一睡(いつすい)の富貴をもさぼるまそ〳〵慾(よく)をとゞめ善(ぜん)をつみ
本伝よ伝せ〳〵犬士の如き心の師(し)と友(とも)とうてあこ
ふひそつしみまゞりうそえうぶ〳〵又人よ死(しぬ)るハ
本伝の里見父子(ふし)の如くあるべき業(ごう)善(ぜん)を丁寧(ていねい)
深伝(ふかくつた)ふまあるべき業(ごう)善(ぜん)を丁寧(ていねい)
百五巻を終(おは)せうあくまで如(ごと)く乞本傳一部(いちぶ)
とところべしさるまでも結(むすび)ぬ〳〵もさぞん

本編八させる大
場もなく又巧
なるもなく拙
伝(つたへ)千章万段
〳〵と一事も漏さ
を筋(すじ)て言(こと)を盡
さるべく八同好(どうこう)和
音(おんじん)の故(ゆゑ)あるまと
外人のせざる所(ところ)を
筆労(ひつらう)も思(おも)ひまろ
らまろ〳〵感悦感
賞(かんしやう)ゐ〳〵もの
さまろて不敏(ふびん)の批(ひ)答
さ〳〵文〳〵八疑惑(ぎわく)を
解(とか)んが為(ため)ふ〳〵て噴飯(ふんぱん)
ふ倘(もし)ある而已(のみ)已
病眼五(ご)年ふ〳〵
又筆硯(ひつけん)ふ疎(うと)
〳〵ろ〳〵と繁(はん)ふ本
編の外ふ又(また)の
物許(ものゆる)を聴(ゆる)〳〵と願
ふ〳〵あの故(ゆゑ)ふ

誉も亦代々その学を
厥ひとして鄙言を
おゝふ盡しなり敬
味あらハ幸ひ正し
とやいハまし

しろうふおのれが如きこおそんにさらあぢはひはてハ
感心感服かくの如しましてや具眼の人称へ見
ざらめや覚おもんざらんや

回外剰筆ハ自注にある如くの弱なれバ元より評など
そべきるすあらじ前回ぎりまて等をそしむべきな
まどもかくの如く標題を附られて目孫中にもしる
されあれバ巻端附言とハ又ことなりさるを何ともいえ
ざらんハるすたらぬやうもなきたるれバおのれも評外
剰筆として此弱につきておもへるんの内幕を例

評蘇回外剰筆
さん等閑に見過さ
まして全言玉語
を漏らししハ意外
の大幸なるかな但し
結局上編より本編
ハおりてハ代筆の
誤字のこなりとも
多工音成と云者
不謬らして誤脱
数ある不遑あるを
開板の後あの下を
少くとも臍を噬とも
及ばさる後悔ハ
只是のこなりとも作
者暗記の矢も亦
ちなり剰筆中所
所々吟しる衣笠
内府の加へし蓑の
歌の下の句ハいとく
しらへり今拙きるに
まま木集雑
かゝれ蓑に名をかく
ことなきもなしにあら

の筆まりせにやてアルる弱中に賤名おある如く
かくじかふく敷まへをかゝぶりて公翁とおもふるす
かぞふまハてに三十七年百里のへだてあれバ面話
こそあまこ度ふらの隙昏往来ハさるほどの年
ごろなれバ本傳のうへのこなりしに何くれの幕のうち
戯房話説も志めされて知りはてありしを今
此弱をアルれバさらに又ことに面謁會話して公翁の
此五六年をまのあたりアルなくのんじせられて
感嘆にしへざるすいとくおほうり餘るすハしらず
おきてさしあたり本弱衰眼中の結局口授代写

まて成まるゝを是と幕の内を知らざる世間の人こたゞめて知りふバしれらその労をおもひその妙をおどろかざるべきかゝて知るおのれも狂ありふにかの毛声山が妙文なるも本書ありての評註にてろ代写文筆の子弟なりこれハあらゝにはこれでお話しかし百巻のたゞめよりありしまぢを結びをさもるの結局弱こさるを女筆の代写に口授して其妙以前の自稿にかたらぞおびの迷漏をきハさらまもいたゞ曲折波瀾の妙不さあるハあやしきまでに驚くるの妙こゝり其妙ハ

天授にて自然なるも有らめどかくまでの口授ハ又其労いかにもおもひたらまでをうけて今頃の是まで熟をきまで筆もてかくとにつとの成されしいさをのほどを又あやしきまでにおどろき感しられて其いとづきをおもふにハ心ぐるしくさへぞおもえるゝやしらふぐら其口授の労其代写の苦江湖上千萬人敬官の幸ひにて結局を見ゆるのよろこびいくばくならん全板裏宝盆ゝる書肆のよろこびもさぞならん評中にもいへるめく此美玉に闕あらバ千載の遺憾ならべきに全成いよく光を

潜誤送忘なれ
とをおんや差る
不猶あまりなり右
の三ヶ條ハいゆる此
夫咲中の抄録物を
愚娘に捜索させ
しかり不圖見出し
しるんかまい素より
知らざるにあらを
元是にて回外剰を
不或ハあやまり或ハ
漏たしハ春負ひ
児を人に問ふよりも
慈なる紀老惚で且
不眼にかなりしをかり
行なし紀者にあらを
をかし志なるに評
アねハ此ゆるの指摘
に拙念なく懐舊
の情誼をとまかに
速に是ハ実に三十
七ハ年来の大知
識といひたいをあら

ひとえにけりとく親族
而情恩ならりなどを
以て秘せよとなき已
も言ひ尽せる二氏
評書今年四月上
旬におとさましかど
已早春より病患
あり五月に至りて惜
かとろしに六月又
中暑の患ある而已
ならずて五月下旬よ
り癰瘍にて今も
尚病床にあるあ
から前の好意を
思ふの故に又忍難
木に代筆を謀てあ
社合せ於る果房
最て為猥に贅ふ
而已なるかし
天保十四年
六月大暑前一日
著作堂

まことに実に戦世稗史家の宝玉なるべし ただ
つきせぬ遺憾は賢郎さへも識者のおろそかなる
ところみえて惜むべき條をつみれば おのおの又琴魚の
すのおもむきなれど頭陀が言のあく又そのかの言くそ
へて藪をそえんも今さらやくなし 未の窓によの
きづく百年の後いづれかおくとめとてあるんとし
翁ふるぞすして仙遊あるんには老女頌なりとも
此昏のうへにあらていぞせん 癇眼をふよりは孫
孫にまくして心力は狂瞿嬰をつぐべくおとろへをなく
令嬢賢郎にかならずよくたすけて成功あらするなり

篠斎大人文案前

此等のこまはおきて は賢郎のおそれて日ごろやらるべき
又ふ教のいひことまれかれど労苦は労若なるをさての
今まして八なるまし 一時の芳名をぬ孫よ世なくことよ
てかへて哲ぜるべくなるよおいては賀せざらんやかなえて
べきこさて傑中甲八城の考證は貫多く寡の権従は
ことまもかぞへじ本傳中また附言中の種々解釈
狂餘編他巻まも明弁ぬ論のあらざるはなし 燕石
雑志玄同放言其外蔵書ふらぬことぞはえらう
まてさらくこの著も板本写本あまたあれども股中の
書籍に合せてはいまだふるそなよぶなかすべくして百年

の上壽ハもちろんしるべかればそれ吐きつくさざるの時
も有べきなれどもただ今ここでそれが公翁の名
戯筆にあらわれて其まではかくれてあらはれ
かの天弁命字をしるべく勤ざべし去ハあれど又
むかうにおもひつくる名字をとるのは博識ならず
大人先生のこれを養えんとはあらで吐て人に見
せんがためたとへバ米麦の平凡ならぬ奇な諺異聞
をむさぼりもとめて嚥あくまで嘔吐せ呈者の
およびとふせる書庫お腕ずもあしくもいとめにつくふ
つくりするみるあるらんさらして其吐わくまでるなども

一はうりてそめづらしきにいひもてはやさるれこれを
さし〻美養ふのおもふ〻いや増して人のやしなひにハ
なるべくもあらずバいつしかされて名ハ名ざるにむ
られずてただ残魚をとめこ〻養ふあり翁の腹中萬
巻書架あるごやらに積こたくはへられて名字を
たとへあられぬ戯墨の筆をもて吐くとも〻あられぬ自然の書さび
まんとやしなふひ家を養ひ書肆貸本屋ハこれを
ねて本待を養らひ諸人ハ毎に新研と待て奇を
やしなふに勤御の下學悪をのぞきて善をやしなふ
の大いなるハいたでも人このむ好ところ〻狂條中

にあるゝ如く舟車の通ふところ鶏の声せるところ
翁の著跡のいくらざるかぶしかのいくほどもなく名ぶ
知られぬえせ青表紙とハ宵壌のゑぐひともいふんら
狂らしべきてるもあるなれどあまりこもしくなるべ
きてふぞこふことあげてかふことをおとさの恋情の
ゑこにまぎれやせん長短の筆ひハえより翁のこのま
もざるところなれバいひるぎふバ冷矢とやらしぬん
とまれかくまれ牧野鷹揚の能ある人ハあらを
されど渭濱漁民戯作者も伍をなして蓑笠
居天地一草亭まこと漁者ゝ漁者なるゝハ知ら

るゝ知られぬし後世の西伯にまうされて眼前の
高車栄名ハいそがれざるとれ翁のこころにて有べき
かゝしバそのをしさべく歎ぜべきもしいてハいくべら
ぞとおもひたらるゝハいかにあらんかろうおもひもしら
さらに三十餘年相識の甲斐ハありけりと莞爾も
せられんゝ前もいつあく此條ハたゞ感讀にある
べきのミみぐりに言を附せべきなるぬをす何れ
と例のなしひのくてぐしき長言を昏きつけらる
錦繡の幕の内へ砒布を張けがしらとやいとまし
矣終のをこゝにさハたゞこれのミ今此年ごろふと

せし筆のさきびより評ふぞ潜称し新編ごとに
昏きちしらる乱言狂語ひろまこんにとぞめ
くりて賢答をさへたまはらしんどゆくばはら
どころ云き罷まてありたりそれもこれも又かの
年長きお識らひにあづかてたまはれゆきさせ
たまへやはれかしこく第ついで五言四句のうちハしらせの
如くなれバ三十一とじを和して此一笑までに
光をバかくれ蓑笠隠しても玉かのづからおかの樋
天保癸卯春三月　イ　篠齋野叟
著作堂老先生玉案下

所書ある巻たちしろをあけて
上ゟ三百徑下ケて成らせ
以上ハ作し所書ハ来て
与限墨ニ有 宜家ハ来墨者
合百ことにて 来ニ口宗し也成て
来墨ニて以指以云ハ
来墨ハ所にてハトあるハ
以心得ハ先ハ上冊ハ
同様ハ以心得ハ先ハ
急候ハ此第二度ハ上冊
大体ハ文仕ハ

やし筆のさきびよう評ふぞ潜称新編ごとに
昏きちしらる乱言狂語ひろまこんにとぞめ
くりて賢答をさへたまはらんどゆへバはら
ごころこそき罪にてありけりそれもこれも又かの
年長きお識らひにあらぶりてたまえれゆきさせ
たまへやはれかしこく第ついで五言四句のうちハしらせの
如くなれバ三十一とじを和して此一笑までに
光をバかくれ蓑笠隠しても玉かのづからおかの樋
天保癸卯春三月　イ　篠齋野叟
著作堂老先生玉案下